様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５２１８２

研究課題名（和文）高齢者のライフヒストリーにみる空間／場所の経験－「高齢者の地理学」への挑戦－

研究課題名（英文）The life-histories of elderly people viewed from experiences of space/place : addressing the challenge of geography of the elderly

研究代表者
吉田　容子（YOSHIDA, Yoko）

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：７０２６５１９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,600,000円、（間接経費）　780,000円

研究成果の概要（和文）：京阪神大都市圏内の都市部・郊外および過疎地域で行った高齢者インタビュー調査から，高齢者の地域アイデンティティ形成過程を描き出すとともに，調査地域の自然的・社会的環境や高齢者間の属性の違いをふまえながら，高齢者が地域で生活していく上で必要なコミュニティ形成や福祉サービスについて検討した。とくに，地域の諸活動をつうじて形成されてきた高齢者の地域アイデンティティが，地域に根ざして生きる彼/女らの「いま」にいかに影響しているかを実証することができた。

研究成果の概要（英文）：From an interview survey of elderly people in the urban, suburban and depopulated regions of the Keihanshin (Kyoto-Osaka-Kobe) metropolitan area, the process by which local identities of elderly people are formed was delineated, and based on differences in the natural and social environment as well as in the attributes of elderly people in the surveyed region, the community forms and welfare services that elderly people require in local life were investigated. In particular, local identities of elderly people are formed through various local activities, and the survey verified the extent to which these identities influence the"now"of elderly people whose lives are based in local areas.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：高齢者　ライフヒストリー　空間/場所の経験　地域アイデンティティ　福祉サービス

１．研究開始当初の背景

「超高齢社会」に突入した日本では，国や地方行政が高齢者に向けたさまざまな政策を実践している。誰もが避けることのできない‘年をとる（aging）’という生物学的老化現象は，身体機能を低下させ，日常生活に支障をもたらす。しかも高齢化は，一人ひとりに現在進行形でふりかかってくる。だからこそ，‘待ったなし’の高齢者の問題に対しては，緊急に対策が講じられねばならない。

現在，国や地方行政が実践している高齢者向けの福祉サービスの供給は，高齢者一人ひとりの日常生活を十分なものにしているだろうか？決してそうではないだろう。その原因のひとつは，高齢者個々人の間にある差異が捨象され，「高齢者」という一括りの年齢集団として捉えられていることにある。

では地理学は，高齢者の問題にどれほど貢献してきただろうか？日本の地理学では，1990 年代以降「高齢者の地理学」というサブ・ディシプリンのなかで，高齢者の居住環境や福祉サービスの供給に関する研究が進められてきた。しかし，それらの研究には，高齢者を一括りの年齢集団として一般化して捉えようとする傾向がみてとれる。もちろん，高齢者が直面している問題を一般化・普遍化することも，研究上あるいは政策上，重要な意味を持つが，そのさい，高齢者一人ひとりが置かれている状況を忘れてはならない。なぜなら，高齢者が抱えている問題や日常生活の不便さは，一人ひとり異なっており，一括りの処方箋では十分に解決できないからである。したがって，高齢者間の差異に気づき，そこに注目することが必要である。

「差異（difference）」への注目は，フェミニズムが当初，白人・中産階級の女性の価値観にもとづいた概念であったことへの批判として提示された。ジェンダー，エスニシティ，階級（階層），年齢，障がいの有無など，さまざまな差異軸が存在する。社会には，こうしたいくつもの差異軸の交差から生じる差別や不平等が蔓延っており，たとえば高齢であるということのほかに，出自，教育レベルや職業・職種など，多様な面から個々人の差異をみる必要がある。

２．研究の目的

本研究では，京阪神大都市圏内の都市部・郊外および過疎地域等において高齢者へのインタビュー調査を実施した。この調査から，各インフォーマントの地域アイデンティティの構築過程を描き出すとともに，調査地域の自然的・社会的環境や高齢者の属性（性別，出自，教育レベル，所得階層，家族や生活状態等）を踏まえて，高齢者が地域社会のなかで生活していくために必要なコミュニティ形成や福祉サービスのあり方を検討する。すなわち，高齢者が安住できる「終の住処」となりうる地域社会を模索する。

３．研究の方法

おもに 75 歳以上の後期高齢者を対象に，ライフヒストリーを聴取した。高齢者一人ひとりのライフヒストリーから「生きられた世界」を把握し，それが現在に繋がって高齢者間の差異を生み出していることを検証する。ここでの「生きられた世界」とは，ジェンダーをはじめ，さまざまな差異軸の交差によって生じた差別や不平等の中での関係性をつうじて経験されたものである。

具体的には，以下の３つの調査を実施した。

（１）京都府相楽郡和束町内の各地区では，高齢者間のコミュニケーションをはかる目的で，地元ボランティアのサポートによって，「サロン」とよばれる高齢者の集まりが月１回開催されている。本研究では，同町内のある地区の「サロン」を事例として，「サロン」の活動をつうじた高齢者たちの生きがいやコミュニティ形成について検討した。

（２）和歌山県新宮市では，部落解放同盟女性部が核となり，当該地域の女性たちによる政治への積極的参加によって，子育て支援や困窮高齢者支援などの多様な福祉的課題に対応しうるコミュニティづくりが進められてきた。近年，中心メンバーの高齢化から，活動を担う女性の世代交代があった。本調査では，かつてのリーダー役であった女性からライフヒストリーを聞き取り，当該地域での活動をつうじて自己アイデンティティがいかに形成されていったかを明らかにした。

（３）大阪市の郊外地域として位置づけられる奈良市，中山間地域で過疎化が進行している奈良県吉野郡黒滝村と同郡十津川村，半農半漁の地域として和歌山県西牟婁郡白浜町において，高齢者へのインタビュー調査を実施した（以下での研究成果の報告は省く）。

４．研究成果

（１）京都府相楽郡和束町での調査結果

和束町は京都府の南端にあたる相楽郡の北東部に位置し，町の中央を流れる和束川に沿って集落が立地する。京都市街へは約 30㎞，奈良市街へは約 15㎞ と比較的近い距離にあるものの，和束川の開析による谷地形のため，JR 等の鉄道が開設されず，交通アクセスや生活の利便性が悪いうえ，就業の場が確保できないなど様々な要因で人口が減少しており，「過疎地域」の指定を受けている。2014 年 5 月時点の町人口は 4,402 人（男性 2,092 人；女性 2,310 人）で，1,752 世帯ある。加えて，2010 年の国勢調査によると，65 歳以上の高齢者の占める割合（高齢化率）は 32.6%であった。少子化も進んでおり，現在，小学校および中学校は町内に各１校のみで，高等学校はなく，町外に通学せねばならない。同町では，山の斜面を切り開いた茶畑景観がみられ，宇治茶（和束茶）の産地として知られる。

和束町内の各地区では，高齢者間のコミュニケーションを図る目的で，地元ボランティアのサポートによる「ふれあいサロン（以下，

サロン）」とよばれる 17 の高齢者の集まりがあり，月１回のペースで開催されている。本研究では，2013 年 2 月～2014 年 3 月の間，同町内Ｂ地区のサロンに実際に参加し，サロンの活動をつうじた高齢者たちの生きがいやコミュニティ形成について調査するため，参加高齢者のライフヒストリーの聴取を行った。Ｂ地区のサロンを対象とした理由は，町内のサロンの中で，立ち上げ以降とりわけ活発な活動を続けてきたことによる。Ｂ 地区のサロン立ち上げ当初から，ボランティアとして関わってきたリーダー的存在の女性が，自身が高齢になった現在も，サロンの運営に積極的に取り組んでいることから，この女性（Ｎさん，70 歳代後半）への聞き取り調査も行った。Ｎさんは和束町出身であるが，自身の仕事（小学校教員）と夫の仕事の関係上，和束町内に家を残したまま奈良市内に居住し，定年退職後に和束町に戻っている。

同町の社会福祉協議会（以下，社協）では，従来から町内各地区で活動している「老人クラブ」とは別に，高齢者のコミュニケーションを図ることを目的とした活動団体の立ち上げを目指していた。老人クラブが和束町役場福祉課の下部組織に位置づけられ，町内清掃，ゲートボールやグランドゴルフなどのスポーツ活動や学習講座，小学生以下の子どもの安全のための見守り活動など，体を動かす実質的な活動を中心に展開されていたのに対し，社協では，地区内の高齢者がもっと気軽に地域内で交流できるグループづくりの必要性を感じていたからである。これは，社協が町内 70 歳以上の高齢者をサンプルに訪問調査を行った結果から出てきた，喫緊の課題であった。1999 年春頃，和束町内の老人クラブ連合会よりＢ地区老人クラブに，「サロン」立ち上げの提案があり，実質的には地区内でボランティアを募って立ち上げ準備が始まった。したがって，「サロン」の位置づけはボランティア団体ということになる。

当初ボランティアには 8 名（うち１名は男性で，Ｎさんの夫）が手を上げ，退職後和束町に戻っていたＮさんも関わることになった。社協からのアドバイスを受けながら，Ｂ地区サロンは，1999 年 9 月に町内で 10 番目にスタートした。参加資格は，Ｂ地区在住の 70 歳以上の男女とし，当初は 25 名（男性 9 名，女性 16 名）で，地区の公民館を使用した。しかしサロンでの交流活動で使用する機材や道具（例えば，カラオケ器機，パイプイス，ホワイトボードなど）は，社協から提供される民間企業の福祉助成金公募情報をもとに，Ｎさんが中心となって申請書を作成・応募し，獲得していった。サロンの活動内容について社協はあえて関与しなかったので，各サロンで工夫する必要があった。教員経験の長いＮさんは，毎回季節ごとの行事や話題を取り入れた歳時記的な説明をメインに設定し，これを核に，室内で体を動かせる簡単な体操や遊びを取り入れた。

写真１　七夕をテーマとした 7 月のサロンの様子
（2013 年 7 月 8 日，吉田撮影）

毎月のサロンは，午前 10 時～午後 3 時半頃まで開催される。1999 年 9 月にＢ地区のサロンが開催されてから現在まで，Ｎさんとボランティア（現在，Ｎさんの他に 3 名がほぼ毎回参加）で，サロンの準備を行ってきた。季節の行事を話題にしたサロンの内容をＮさんが決め，それをもとにＮさん宅にボランティアメンバーが集まって打ち合わせを行い，サロンの活動に必要なものを準備・購入する。たとえば，７月のテーマは七夕で，事前に七夕飾や竹を用意して飾り付けた。当日は一人に１枚ずつ短冊が配られ，参加者たちは願いを書き，各自がそれを竹に結ぶ。また，七夕の由来を説明するため，Ｎさんが，あらかじめ色画用紙に故事や絵を描いたものを，説明しながらボードに貼っていく（写真１）。さらに，七夕にちなんだ季節の和菓子を参加者全員で味わうなどの工夫がされている。このほか，玉入れや輪投げなど軽く体を動かしながらのレクリエーションの時間もある。季節の行事を話題に取り上げているため，過去のある月のサロンの内容と同時期の内容とが重複して参加者が退屈しないよう，テーマは同じでも紹介する内容を少し変えたり，リクリエーションに使用する道具等も少しずつ手を加えて改変・改良している。

Ｎさんは，「ある月のサロンが終わって数日経つと，もうすぐに来月のサロンで何をやろうか，あたまの中がいっぱいになる」という。「去年と同じことでは，参加する人が「それ去年もやった」と思うので，今年は少し違うことをしたいから，ボランティアのみんなと一緒に考える」「大変だけど，これが私の生きがいになっていて，そろそろ参加する方に回らないといけない年齢なのに，なかなか手を引けない」というように，当初はボランティアとして手探りであったサロンの運営が，14 年以上携わってきた現在では，Ｎさんにとって重要な意味をもつものになった。

Ｎさんが長年ボランティアとして活動を続けてこられたのには，夫の理解が大きいといえよう。サロン開設当初から夫婦でボランティアを引き受け，現在夫はサロンの参加者でもあるが，サロンの準備で必要なものを購

入する際は，車の運転をして一緒に出掛けるなどのサポートをしている。また，他のボランティアメンバーと良好な関係性を築いてきたことも非常に大きな要因である。Nさんは B 地区の出身であるものの，教員生活の間は実家を離れていたため，ボランティアとしての活動を通じて，ボランティア仲間はもちろん，地域の高齢者ともコミュニケーションを重ねていった。

他方，高齢者への聞き取り調査から，彼/彼女たちにとってのサロンの意味や存在について考察した。現在，毎月のサロンに定期的に参加しているのは，70 歳代半ば～90 歳の 22～23 名（男女ほぼ同人数）で，自宅から徒歩や自家用車の運転で公民館に来ることのできる人たち（家族の送迎もある）である。茶農園を夫婦で続けている世帯もあるが，大半の人は就業していない。男性は B 地区の出身者であるが，女性は結婚を機に当該地区に居住するようになった。当時の通婚圏が和束町内あるいは近隣町村であったとはいえ，女性は「嫁に入って何十年も経たないと，その家の人にはなれなくて，お姑さんたちが亡くなってようやくなれる」「この辺の人たちとこんなに仲良しになったのは，サロンに来るようになってから」「サロンを休む人がいると，あの人今日はどうしただろうって，みんなで話すよ」（筆者の聞き取り調査から）などの語りをもとに考察すると，彼女たちは，嫁ぎ先という馴染みのない空間から，B 地区で長年暮らす中で「生きられた世界」をつくり，高齢化してからのサロン活動によって，さらに，これまでの生活に根ざした愛着のある場所を獲得していく。男性についても同様のことが指摘される。町内の学校を卒業後就業すると，当該地区に居住していても仕事を中心とした関係性が重要となる。しかし，高齢化してサロンの活動に参加するようになると，「おれとあいつは同い歳よ。小さい頃はよく遊んだ。だから，いまも昔みたいに仲がいい」というように，かつての同級生や近所の顔見知りとの交流が再びはじまり，彼らにとってサロンは意味のある場所となる。

和束町内の各地区で取り組まれているサロンのような活動は，いまや全国でも行われており，さほど珍しい事例ではない。しかしながら，こうした全国での取り組みが，今後の超高齢化社会にどのような有効性を持つのか，この調査では B 地区での活動やその主体に注目して参与観察をつうじて検証した。

（2）和歌山県新宮市での調査結果

新宮市の同和地区で，コミュニティワーカーとして活動した一人の高齢女性に着目した。彼女のライフコースにおける多様な実践の中で紡がれてきた様々な関係性をとおして，生活空間である同和地区が「セーフティネットの空間」として独自の生活保障の機能を有するまでのプロセスを明らかにした。地域社会で福祉の担い手として活動するコミュニティワーカーへの着目は，今日的な地域福祉の課題を捉える一助となる。また，コミュニティワーカーのライフヒストリーから，女性・高齢・同和地区居住者という重層的に差異化された存在として，コミュニティワーカーのアイデンティティの構築プロセスを把握する。以上のことから，高齢女性の主体形成と場所との関係性を究明した。

2011 年～2014 年にかけて新宮市でコミュニティワーカーとして活動するMさん（1941 年生）に非構造的インタビューを試み，住まい，地縁関係，解放運動，福祉活動など地域での実践に関するデータを蓄積した。Mさんへの聞き取り調査以外に，コミュニティワーカーの活動拠点となる同市内の隣保館の関係者，部落解放同盟新宮市部のメンバー，市役所福祉課職員などへのインタビュー調査を実施し，Mさんのライフヒストリーを補完する情報を収集した。また，新宮市の議会資料や市の公式統計，新宮市内の福祉系の市民団体の活動資料などの文献資料などを収集し，同市における福祉コミュニティの形成過程について整理した。

新宮市の同和地区では，解放運動とともに実施されてきた隣保館活動をとおして，地区内の生活困窮をめぐる問題に対応してきた。特に1980年代以降の部落解放運動における女性の組織化と政治への積極的な参加が，子育て支援や困窮高齢者支援をはじめとする多様な福祉的課題に対応可能なコミュニティ機能を高める契機となった。Mさんをはじめ女性たちの活動が，物質的な地域改善を目的とした同和対策事業と組み合わさり，ケア・居住・就労を軸とした独自の生活保障システムが確立され，「セーフティネットの空間」が形成された。しかし，こうした女性の多様な活動は，詳細な「活動経過報告」が残されていないため，Mさんのライフヒストリーをもとに，生活空間の改善をめぐる実践を明らかにした。

新宮市では，中心市街地とその周辺の 7 地区が同和地区に指定されており，約 350 世帯が関係する。同和対策事業の一環として，7 地区には改良住宅と隣保館が設置され，住宅と地縁的なコミュニティサポートの機能を持ち合わせた生活空間が整備されてきた。隣保館では，就労支援，子どもの養育および教育援助，独居高齢者の見守りなどを中心とした独自の地域福祉活動が実践されており，不安定就労とそれによる生活困窮状況にある地区住民の生活支援を行っている。こうした活動には，各地区で組織されている婦人部（1993 年以降は女性部）が活発に関わってきた。識字教室のほか，「解放子ども会」のサポート，生花・茶道のサークル活動など，多くのプログラムが実施されてきた。また，1955 年の部落解放同盟新宮市部結成から毎年開催されている定期大会への参加や要求闘争に関わることで，地域の一員としての役割を担ってきた。しかし，1980 年代まで女性部は組織化されておらず各地区の女性の自

主的な集まりで，私的領域の延長上にあるものだった。こうした領域での女性たちの実践の中で特筆すべき活動は，A地区における住宅建替え要求へのMさんたちの関与である。

新宮市は，1959 年に国の同和対策要項に基づく「同和事業 10 カ年計画」のモデル事業地区に指定され，Mさんの暮らすA地区は，この事業開始翌年 1961 年に，改良住宅（同和向け公営住宅）と一般向け住宅の混住型住宅として建設された。しかし住宅が急傾斜危険区域に立地しているため，度重なる土砂崩れと地盤の問題から，住宅建設から数年後に移転・建替えを要求する運動が活発化した。

解放運動では一般的に，融和の否定，部落民としての団結が強調されてきた。しかし，一般住民と同和地区住民が混住する状態のなかで，子育てや地域の高齢世帯への手助けといった私的領域で蓄積されてきた女性たちの関係性には，部落民か否かという垣根はなかった。私的領域での経験を共有した女性たちが共闘して建替え運動に関与し，Mさんは地区の女性数名とともに，住宅建替えの建設委員のメンバーに加わった。Mさんらは，建設委員会で，住宅の間取り，コストを抑えた外観，高齢者・障害者の見守りが可能な住宅配置などいくつかの提案を行い，結果的にそれらの意見が十分反映される形で住宅建替えが実現することになった。

従来の部落解放運動においては，差別の解消と地区改善による環境改善を第一義として要求闘争が展開されてきた。それは，物理的な実体の変容という実質的な成果をもつ社会運動（水内,1988；若松,2004）の典型であり，男性を中心とした公的領域において担われてきた。しかし，私的領域での活動に留まっていた女性が，住宅建替え要求という「政治」に参加することで，住宅の間取りや外観，そして，配置などの物理的実体の変容に大きく関与した。こうした女性部の関与は，主婦や高齢者，そして子どもが日常の多くの時間を過ごす私的領域における生活像を居住空間に落とし込み，日常生活において築かれてきたコミュニティのもつ機能を可視化させることにつながった。

Mさんは，住宅要求運動の成果やその他隣保館活動の取り組みでの経験を買われ，1997 年から市の嘱託職員として，隣保館を拠点に高齢者向けの地域福祉相談員として新たな活動を開始した。一般的に，福祉関連の相談業務は，各制度に基づきクライアントとして対象化された時にのみケアや支援の対象になる。しかし，新宮市の同和地区においては，年金無受給高齢者の問題や，子どもの学力問題など，既存制度の対象となりにくい複合的な福祉課題が多く存在してきた。そのため，解放運動においては，要求や行政闘争によって「福祉」の対象範囲を拡大することに力が傾けられてきた。その運動成果の一つが地域福祉啓発相談員の配置であった。

1997 年の事業開始から 2013 年まで，Mさん一人が継続して相談業務を担っている。相談業務は相談員が各地域の対象世帯を個別に訪問する巡回型のもので，相談員であるMさんが対象世帯を定期的に訪問することで，高齢者のニーズを拾い上げ，サービスをコーディネートする支援が行われた。Mさんの相談延べ件数は年平均 2000 件，相談対象実人数は 50 人を超える。些細な日常生活支援から，高齢単身者の看取りやその後の家族のケアまで，幅広い相談・支援活動を行なった。相談内容は生活に密着した課題であるものの，制度では十分に対処できずに埋もれてしまうニーズ，あるいは，家族の不在によって対応できないニーズを丁寧に掬い上げ，制度的な福祉に接続していく役割を担っている。Mさんが相談員に推薦された理由は，同和地区内での婦人会活動や隣保館活動などを通して地域の高齢女性のリーダー役として活躍していたこと，すなわち私的領域での活動が評価されたことだった。しかしMさんは，地域福祉相談員としてのコミュニティワークは私的領域の延長上としてボランタリーに実施されているものではないと強調する。Mさんが私的領域において培った生活知は，相談員という公的領域である役所の肩書きを持ち，給与所得を得ている立場であるからこそ活かされるものだと認識している。つまり，Mさんが公的に承認され，私的領域と公的領域を往還することでニーズを拾い上げ，それを制度に接続する役割を担っていることが，コミュニティワーカーとしての主体形成に大きく関わっていると考えられる。

Mさんのライフヒストリーから，新宮市の同和地区が，Mさんの地域での活動や相談員業務が結節となり，住宅，ケア，複雑化した福祉課題への対応などが可能な「セーフティネットの空間」としての機能を持つことが明らかになった。Mさんの従来の生活の中で培われてきた人々との関係性や地域での活動実践は，女性としての生活知を強調した独自性を保ちながらも，要求闘争という「政治」に関わることで，暗黙のうちに私的領域と公的領域の境を曖昧にしてきた。また，Mさん自身が人々のニーズを拾い上げる地域の長老の世話役として承認されるよりも，嘱託相談員として役所に所属している相談員として公的に承認されることを重視している。つまり，公的領域における相談員という労働を通してこそ私的領域において不可視化されたニーズの掘り起こしが可能であり，同時に，そうしたニーズにアクセスするには，私的領域において培った生活知なくしては制度につなげることができないといった両義性を持つことが確認できる。

Mさんの長きに渡る活動から，部落民であり女性であるという差異を受け入れつつ，それを戦略的に活用しながら地域での様々な実践を行ってきたことが明らかとなった。Mさんは 2013 年をもって相談員の職を辞した。役職を離れた一高齢女性としての実践につ

いても引き続き注目していく予定である。

（３）IGU（国際地理学連合）の「ジェンダーと地理学」コミッション主催のプレ・カンファレンスの開催

「ジェンダーと地理学」のコミッションではこれまで，IGU 本大会および地域大会の際，プレ・カンファレンスを開催してきた実績がある。そこで今回は，お茶の水女子大学の熊谷圭知教授が研究代表を務める科研グループと協力して，2013 年 8 月 1 日～4 日に，「ジェンダー，権力，知―ローカルセンシティヴによるグローバルネットワークの構築―」をテーマに，奈良女大学で開催した。4 日間のスケジュールは以下のとおり。

8 月 1 日は午後からレジストレーションを開始し，ウエルカムパーティを開いた。2 日と 3 日の二日間は，「ジェンダー，エスニシティ，移住」，「グローバリゼーション，国境，移動」，「女性の雇用と社会-経済的変化」，「ジェンダーとセクシュアルアイデンティティ」，「ジェンダーと公的／私的空間」，「オルタナティヴな地理学をめざして」の 6 つのペーパーセンションで，計 20 名の研究発表があった。3 日のペーパーセッション終了後，プレ・カンファレンスをまとめる総括セッションを設けた。そこでは，欧米中心の視点に根ざしたフェミニスト地理学からの脱構築についての問題提起や，フェミニスト地理学に男性研究者がどのように関わっていったらよいのか，また，ローカルセンシティヴであるために私たち研究者はどうあるべきかという問題が挙がった。最終日４日に実施したフィールドトリップでは，大阪市西成区のあいりん地区や，再開発によってジェントリフィケーションが進んでいる阿倍野区から天王寺区にまたがる一帯を視察した（写真２）。

４日間の参加者は，日本（中国からの留学生を含む）をはじめ，アメリカ合衆国，インド，オーストラリア，イスラエル，シンガポール，カナダ，スイス，ノルウェーなどから 41 名であった。この４日間は，研究面でのディスカッションはもちろん，参加者間でフレンドリーな関係が構築できたことが大きな成果であった。

写真２ フィールドトリップを終えて JR 鶴橋駅（2013 年 8 月 4 日，吉田撮影）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①YOSHIDA Yoko, MURATA Yohei and KAGEYAMA Honami, Toward the Development of the Geography of Gender in Japan: Advances in Research and Prospects, *Geographical review of japan Series B*, 査読有, 86-1, 2013, 33-39. https://www.jstage.jst.go.jp/article/geogrevjapanb/86/1/86_860106/_pdf

②稲田七海,「セーフティーネットの空間」の形成とジェンダー―同和地区におけるコミュニティワーカーの実践から―, お茶の水地理, 査読無, 51 巻, 2012, 2-16.

〔学会発表〕（計 2 件）

①YOSHIDA Yoko, MURATA Yohei and KAGEYAMA Honami, Toward the Development of the Geography of Gender in Japan: Advances in Research and Prospects, Pre-Conference of the IGU-Commission on Gender and Geography, 2013 年 8 月 3 日, 奈良女子大学

②YOSHIDA Yoko, Lived World of Elderly People in Japan: Analyzing Their Life History, 32th International Geographical Congress (IGU), 2012 年 8 月 29 日, ケルン（ドイツ）

〔図書〕（計 4 件）

①吉田容子, 丸善出版,『人文地理学事典』「フェミニスト地理学と批判地理学」60-61, 2013, 761.

②影山穂波, 丸善出版,『人文地理学事典』「ライフヒストリーと地理学」322-323, 2013, 761.

③稲田七海, 丸善出版,『人文地理学事典』「貧困と社会的排除・包摂」224-225, 2013, 761.

④原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓, 洛北出版,『釜ヶ崎のススメ』(「第 10 章 変わりゆくまちと福祉の揺らぎ」, 319-344), 2011, 400.

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　容子（YOSHIDA, Yoko）
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：70265198

(2)研究分担者

影山　穂波（KAGEYAMA, Honami）
椙山女学園大学・国際コミュニケーション学部・教授
研究者番号：00302993

本岡(稲田)七海(MOTOOKA(Inada), Nanami)
大阪市立大学・都市研究プラザ・研究員
研究者番号：70514834